

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	若尾 良徳
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	乙 第 9 号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第13条
学位授与の日付	令和 6年 3月 17日
学位論文題目	保育者における結婚・出産後の就業継続のライフコース展望 に関する研究
論文審査委員	主査 瀧川 光治(大阪総合保育大学教授・博士(教育学)) 副査 渡辺 俊太郎(大阪総合保育大学教授・博士(心理学)) 副査 鈴木 みゆき (國學院大学教授・博士(医学)(医学関係))

〔1〕 論文の概要

本研究は、保育者養成校学生及び現職保育者のライフコース展望に関する研究で、結婚・出産を経て仕事を継続するための要因を検討した研究である。保育者養成校学生のライフコース展望についての研究は多少あるが、現職保育者についてのものはほぼ皆無であり、そこに焦点を当て検討して得られた知見は有益である。

これまで職場環境等の条件を整え、資質・能力を高めれば保育者は保育職を続けようとすることを前提にしていた言説が多いが、本研究により、保育者の離職にライフコース展望が影響していることを明らかにしたことは大変示唆に富む知見である。また、2010年代以前～2020年代における保育者・養成校学生のライフコース展望の変化を明らかにしつつ、保育者効力感はライフコース展望に関連、影響しないことや、“保育者は成長しない、評価されない”というイメージが結婚・出産退職希望、および保育職以外への再就職希望を促進することも明らかにしている。さらに、養成校学生の一定数は、すでに学生時代から結婚・出産を期に退職し、子育てに専念したいというライフコース展望を持っており、それは就職後も、職場環境や各種要因が整っていても変化しにくいという知見は有益である。

それらを踏まえて、保育者養成校におけるキャリア教育や保育者論等の教育、現職の研修等においてライフコース展望について考えていく機会等を取り入れていくことを提言しており、新規性に富む研究であると評価できる。

このように、本研究においてライフコース展望の視点から明らかになった様々な知見や提案されている事柄は大変有益であると言える。

本論文の構成は以下の 14 章からなる。

はじめに

第 1 章 保育者の就業の現状と課題

第 2 章 女性のライフコースと性別役割分業意識

第 3 章 保育者のライフコースに関する意識

第 4 章 保育者のワーク・ライフ・バランス

第 5 章 本研究の目的

第 6 章 研究 1：保育者のライフコース展望の実態，および保育者効力感との関連

第 7 章 研究 2：養成校学生におけるライフコース展望と保育職の仕事イメージとの関連

第 8 章 研究 3：現職保育者における結婚後の保育職継続困難感

第 9 章 研究 4：現職保育者におけるライフコース展望と結婚後の保育職継続困難感との関連

第 10 章 研究 5：2020 年代における養成校学生のライフコース展望の実態およびそれに影響する要因

第 11 章 研究 6：2020 年代における現職保育者のライフコース展望の実態およびそれに影響する要因

第 12 章 研究 7：ライフコース展望と結婚・出産後のライフコース選択の関連

第 13 章 研究 8：結婚・出産後に保育職を継続するための園長の配慮や支援

第 14 章 総合考察

おわりに

引用・参考文献

以下に本論文の概要について述べる。

近年、保育の需要が高まるなかで、保育者（保育士、幼稚園教諭、保育教諭）不足が深刻な問題となっている。保育者不足の主な要因として、保育者の離職率が高いことがある。保育者の離職理由には、労働時間や給料などの労働条件、人間関係や雰囲気などの職場環境に加えて、結婚や出産が多く挙げられている。これまで保育者の離職に関して労働条件や職場環境の問題については様々な研究や指摘がなされてきたが、結婚・出産退職の問題についてはほとんど注目されてこなかった。結婚・出産退職に関して、現代の女性は、結婚・出産後も仕事を継続するライフコースが多数派になりつつある。しかし、未婚女性が希望するライフコースは、現在でも仕事と家庭を両立するよりも、結婚・出産後に退職するコースを望む者の方が多い。保育者のライフコース展望に関しては、養成校学生や保育者の半数以上が結婚・出産退職のライフコースを望んでいることが多くの研究で示されている。結婚・出産後に自ら望んで離職していくのであれば、労働条件や職場環境を改善したとしても離職問題は解決しない。したがって、保育者の離職を理解し、継続を促していくためには、養成校学生や保育者における結婚・出産後のライフコース展望にアプローチすることが必要である。

そのため、本研究は次の4つ問いについて検討している。

第1に、養成校学生および現職保育者がどのようなライフコース展望を持っており、近年の変化はどうか、第2に、養成校学生および現職保育者のライフコース展望に影響を与える要因にはどのようなものがあるか、第3に、現職保育者の離職や継続にどのような要因が影響するか、第4に、第1～第3の問いを踏まえると、養成教育や保育者の研修への示唆として何が提案できるか、といった点である。

これらを踏まえて本研究の目的は、保育者の結婚・出産後のライフコース展望に注目し、養成校学生および現職保育者における結婚・出産後の就業継続に関するライフコース展望の実態とそれに影響する要因を明らかにした上で、養成教育や保育者の研修についてライフコース展望へのアプローチの必要性を明らかにすることである。

研究1では、2010年代における養成校学生および現職保育者のライフコース展望の実態、およびライフコース展望と保育者効力感との関連を検討している。その結果、養成校学生および私立の保育者においては、およそ半数が結婚・出産退職のライフコースを望んでいることが明らかにしている。国公立の保育者においては、結婚・出産退職のライフコースを希望するのはおよそ3割で、およそ半数が定年まで継続を希望していた。ライフコース展望と保育者効力感には関連がみられなかったことを明らかにしている。

研究2においては、養成校学生のライフコース展望と保育職の仕事イメージとの関連を検討している。その結果、養成校学生のライフコース展望は、保育職の仕事イメージと関連していないことを明らかにしている。

研究3では、現職保育者を対象に結婚後に保育職を継続するのにどのような困難があるのかについて調査している。その結果、結婚後に保育職を継続するにあたって、勤務時間・休日、業務負担、給与水準といった労働条件、周囲に迷惑をかける心配といった職場環境、さらに両立・協力、出産・育児といった仕事と家庭の両立が問題になると考えられていたことを明らかにしている。

研究4では、現職保育者を対象に、ライフコース展望の変化およびライフコース展望と結婚後の保育職継続困難感との関連を検討している。その結果、ライフコース展望は、全体のおよそ3分の2が養成校卒業時から変化していなかった。結婚・出産退職を希望する者は、定年まで継続を希望する者に比べて、結婚後に保育職を継続するに「精神的・身体的負荷」が問題になると考えていることを明らかにしている。

研究5では、2010年代から2020年代における養成校学生のライフコース展望の変化の実態、およびライフコース展望に影響する要因を検討している。2020年代における養成校学生の保育職継続希望は、2010年代に比べて、結婚・出産退職希望が減少し、定年まで継続希望が増加していた。幼少期に保育所に通った経験や平等主義的性役割態度が定年まで継続を希望させる要因となっていたことを明らかにしている。

研究6では、2010年代から2020年代における現職保育者のライフコース展望の変化の実態、およびライフコース展望に影響する要因を検討している。2020年代における現職保

育者の保育職継続希望は、2010 年代に比べて、結婚・出産退職希望が減少し、ある程度の年数または自分なりのタイミングで退職希望が増加していた。保育者のライフコースに関して妊娠出産に関連する困難さの認識は、定年まで継続より結婚・出産退職を希望させる要因となっていた。勤務時間の融通、給与水準の高さは、結婚・出産退職より定年まで継続を希望させる要因となっていた。さらに、保育者の低評価や成長の認識は、保育職以外に再就職を希望させる要因となっていたことを明らかにしている。

研究 7 では、ライフコース展望が結婚・出産後の保育職継続とどのように関連するか、また職場環境や労働条件がライフコース展望にどのように影響するかを保育者へのインタビュー調査から検討している。その結果、保育者が結婚・出産後に離職または継続を選択するにあたって、本人がそれまでに希望していたライフコース展望が大きく影響していることが明らかになった。一方で、長時間労働や職務上のストレスは、定年まで継続希望から、結婚・出産退職希望にライフコース展望を変化させていた。また、結婚・出産後の離職に影響する要因として、結婚・出産退職慣行、自分の子どもを自分で育てたいという意識や三歳児神話、配偶者の都合などがみられた。結婚・出産後の継続にする要因として、結婚・出産後も続ける雰囲気や経済的な要因などがみられたことを明らかにしている。

研究 8 では、保育現場の管理職にインタビューを行い、保育職の継続のためにどのような支援が必要と考えているのかについて調査している。その結果、保育現場の園長は、保育職が継続していくために必要な支援として、労働条件の改善、職場環境の改善、キャリア支援が必要と考えて、様々な取り組みをしていることを明らかにしている。

これらを踏まえ、保育者が結婚・出産後も長く保育職を続けるためには、養成教育、現職研修を通して保育者のライフコース展望に対するアプローチが必要であることを議論している。養成教育においては、子どもの育ちについての正しい知識の定着、ジェンダーの視点からのキャリア教育、保育者の評価、成長を実感できる教育が必要であることを提唱している。保育者の研修においては、保育の仕事と私生活の両側面からのキャリア設計支援が必要であることを提唱している。また、保育者の評価を高めることの必要性について議論している。

〔2〕 審査結果の要旨

本学大学院児童保育研究科学位(論文博士)審査規則は第 12 条において次の五つの審査基準を公表している。

- (1) 当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であること
- (2) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること
- (3) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること
- (4) 当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること

(5) 本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること

もとより、博士学位申請論文が五つすべての審査基準を満たしていなければならないわけではないが、本論文がこれらの審査基準にどの程度適合しているか、順次検討を加えて行きたい。

(1) 当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であることについて

本論文は学術論文に以下に掲載された論文 2 編や学会発表 7 件のほか、文部科学省の委託研究 3 件をもとに、必要な加除修正を加えながら再構成を行ったものである。そのため、本論文は、論者の研究の集大成と認めることができる。

<学術雑誌に掲載(採択)された論文>

若尾良穂(2016). 保育職における結婚および結婚後の保育職継続のための困難と求められる支援. 保育教諭養成課程研究, 2, 43-54. 単著. 査読有り

若尾良穂・池谷美衣子(2017). 現職保育者における保育職継続希望と保育者効力感および結婚後の就業継続の困難感との関連. 保育教諭養成課程研究, 3, 3-15. 共著. 査読有り

<専門学会で行った口頭発表>

○単著

若尾良穂(2016). 保育職における結婚の困難. 保育教諭養成課程研究会第 3 回研究大会, 聖心女子大学

若尾良穂(2020). 保育職継続のために管理職に求められる支援—幼稚園長、認定こども園長へのインタビュー調査から. 第 4 回日本保育者養成教育学会研究大会発表(ポスター). 福山市立大学

Yoshinori Wakno. (2023). Work-Life Balance of Middle Leaders in Child-care Institutions in(2023 年 7 月 8 日). Japan. Poster presented at PECERA 2023, Bali. 査読有り

○共著筆頭者

若尾良穂・高向山(2015). 保育・教育系学生における保育職キャリアイメージとライフコース展望との関連. 発達心理学会第 26 回大会(東京大学)

Yoshinori Wakno, Eiji Tsuchikura, & Mieko Ikegaya. (2021). Factors of long work hours among Japanese Early Childhood Education and Care workers. Poster presented at EECERA 2020, online. (2021 年 7 月 8 日), 査読有り

○共著連名者

香曾我部琢・藤田清澄・岩尾良徳・伊藤恵里子・諏訪きぬ・榊原良太. (2018). 保育者の就活と転活における経験プロセス(ワークショップ)日本発達心理学会第 29 回大会発表(東北大学) (2018 年 3 月 24 日)

亀井美弥子・若尾良徳・小野寺涼子・土介英志. (2018). 対人援助職のキャリア発達と学び(ワークショップ)日本発達心理学会第 29 回大会発表(東北大学) (2018 年 3 月 24 日)

(2) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において独創性が認められることについて
ここでは、2 つの観点から、本研究の独創性について述べる。

1 点目は、結婚・出産後に伴う保育者の離職や継続について、養成校学生や保育者における結婚・出産後のライフコース展望にアプローチすることが必要性を明らかにしたことである。従前の研究では、多くの場合、職場環境等の条件を整え、資質・能力を高めれば保育者は保育職を続けようとすることを前提にしていたものが多いが、本研究では保育者の離職にライフコース展望が影響していることを明らかにしたことは大変有益な知見である。また、保育者養成校学生のライフコース展望についての研究は多少あるが、現職保育者についてのものはほぼ皆無であり、そこに焦点を当て検討して得られた知見は有益である。合わせて、2010 年代以前から 2020 年代における保育者・養成校学生のライフコース展望の変化を明らかにしていることも有益な知見である。

2 点目は、保育者・養成校学生のライフコース展望に関連、影響する要因を明らかにしたことである。本研究により、保育者効力感はライフコース展望に関連、影響しないことや、“保育者は成長しない、評価されない”というイメージが結婚・出産退職希望、および保育職以外への再就職希望を促進することを明らかにしていることも有益な知見である。

このように、本研究においてライフコース展望の視点から明らかになった様々な知見や提案されている事柄は大変有益であり、独創性が認められる。

(3) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められることについて

本研究は、保育者における結婚・出産後の就業継続のライフコース展望について、心理学分野の視点から 8 つの質問紙調査及びインタビュー調査から迫った研究である。本研究により「保育者の離職にライフコース展望が影響していること」「2010 年代以前から 2020 年代における保育者・養成校学生のライフコース展望の変化」「保育者・養成校学生のライフコース展望に関連、影響する要因」について明らかにしたことは、心理学の中でも青年心理学に関わる有益な知見を提供している。

さらに、それらを踏まえて、保育者養成校におけるキャリア教育や保育者論等の教育、現

職の研修等においてライフコース展望について考えていく機会等を取り入れていくことを提言していることは、保育者養成教育及び現職教育にとっても有益な知見を提供している。

それゆえ、心理学、保育者養成学の学問研究の水準の引き上げに資すると考えられる。

(4) 当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること

本論文は、保育者における結婚・出産後の就業継続のライフコース展望について、心理学分野の視点から 8 つの質問紙調査及びインタビュー調査から迫った研究である。個人のライフコース展望についての研究は心理学（とくに青年心理学）の研究分野で積み重ねられているが、結婚・出産後にともなう就業継続に関する視点からのアプローチは社会学の研究分野でもある。さらに、保育者養成教育及び現職教育への示唆を踏まえると広く教育学の分野にも資するものである。

そのことを踏まえると、心理学分野と社会学分野を踏まえ、教育学ともつながる学際的な研究と認められる。

最後に、(5) 本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであることについてでは、本論文が提起している視点や考え方は、本学の保育・教育研究領域に関わる研究であり、本学の博士の学位にふさわしいと認められる。

本論文は、以上のように、評価しうる独創性が認められるが、論者自身が今後の課題としたもののほかに、博士学位請求論文公開審査会において 3 名の審査委員により出された問題点について主なものを記すこととする。

第 1 は、研究 7 及び研究 8 のインタビュー調査において、インタビュー時期、時間、分析手順が不明確なので、加筆修正が必要である。

第 2 に、論文の構成上「はじめに」に対応する「おわりに」が不明確な部分があるので、明確にする必要がある。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。これらの指摘に対して課題が残っているが、指摘された点について論者から応答と回答が得られ、必要な個所の加除修正を行うことが了承された。

このように本論文にこれらの問題点が含まれているのは明らかであるが、本論文によって明らかにされた知見は、本研究の属する研究領域に資することを鑑みて本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいと認める。